

春燈

7月号



一九五七年七月
五月
六月
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月

万太郎の句

芙蓉白しつひにやまひにうち勝てる

「春燈」昭和三十七年

「花柳章太郎、健康をとりもどし、新橋演舞場九月興行に出勤」の前書がある。実はこの年の十一月に限定版で「花柳章太郎句抄」が発刊された。掲出句はその序を飾る句である。因みにこの句抄の発行者は鈴木真砂女である。花柳氏への句としては、句集『草の丈』（昭和二年）所収のへらんぎりのうてる間まつや若楓の方が知られてはいるが、正に虚子と並ぶ挨拶句の名手である。

木村傘休

万太郎の句

何か言へばすぐに涙の日短き

句集『流寓抄以後』昭和三十八年

一子の死をめぐりて（十句）の前書のある中の一句である。春燈三月号を手息をのむ思いだった。万太郎の家庭生活は不遇だった。晩年三隅一子とは合縁奇縁、縁の糸で結ばれる。その一子は昭和三十七年十二月十七日急逝。愛しき人を失った悲しみを、こんなにも天真爛漫に詠っている。このあと万太郎は、翌五月六日急逝されたのである。

増淵美枝子

主宰の句

西ヶ原日記 (八)

鈴木榮子

菜の花や小湊鉄道一輛車
落椿全きを拾ひ掌に錆びぬ
油煙墨てふ佳き墨すつて春更けぬ

連合軍接收の邸緑立つ
日本の階級巖と青葉中
侯爵邸和館へお成り松の芯
甘酒横丁走り祭の笛太鼓
足下にて祭囃子を足調子
線香花火鉄火に咲きて火玉落つ
真砂女きくの浴衣で並ぶ祇園祭

試 歩

井上春子

春の雪触れたる枝の紅兆す
車椅子起つや蒲公英まで数歩
摘み草の母子の後ろ通りけり
雲雀野に杖あることをふと忘る
初蝶の過ぐる迅さを眩しめり
春の雲野を翳らす程でなし
今一度歩けし日なり風光る
花万朶人に遅れてゐるもよし
麗らかや帰路を委ねる車椅子
行く春に杖の歩みの追ひつけず

海

風

和田幸江

清明や潮目を分かつ大岬
稽古海女潜るに外すイヤリング
海女二代阿吽の息の長かりし
火を囲む海女の羽織るや紺緋
朝採りの鹿角菜のむしろ日を弾く
憲法記念日河口にたまる芥かな
足許に立夏の波のすばしこし
にはとりの土搔く八十八夜かな
氏素性なき舟虫の四散かな
浜昼顔八方風のメヌエツト

当月集

鈴木 榮子選



○ 松波とよ子

堅香子の花は王朝衣の艶
湯の滾り加賀落雁の風炉手前
白隠の禅画の賛や白襲
等伯の波濤の竜へ卯波立つ
紙魚走る宮尾登美子の平家の書

○ 向井芳子

村の端思慮深く在る座禅草
余花の雨灯して暗き武家屋敷
花枝垂る弘前城の下乗橋
吊橋を大きく揺らす太宰の忌
青葉冷玻璃の明るき斜陽館

○ 宮地れい子

○ 太田佳代子

大川のみづの膨らみ夏燕
やさしさの玉虫色に走梅雨
さざ波の一枚ごとの代田かな
夕さるや明日へ吹きそむ代田風
知らぬ間になくす思ひ出竹落葉

○ 落椿次々踏むは自虐に似
はつたいに噎せて良縁失ひし
花罌粟は一日花や憂さ晴らす
平家より源氏鬘肩や桃の花
似て非なる蒔菫の花と浦島草

春燈の句

鈴木 榮子選

春筍や京都生れのいとやはし

友ありてこそその月日や薔薇芽吹く

雛罌粟の門口にゆれ仮住居

罌粟ひらく床に掲げし多佳子の句

淀の上に寿ぐ詩歌神輿舟

二階より渡る山鉾笛太鼓

青竹を伐り競ひたり鞍馬寺

九十九立つ謀反頭巾や山法師

華鬘草束ねて母の忌を修す

花は葉に積ん読の本殖えるばかり

狛犬の阿呷たちろぐ春疾風

句集「素心」閉づれば八十八夜月

鯉のぼり還らざる日の空あなた

造り酒屋の白壁が好き蝶の昼

美容師と鏡で会話熱帯魚

埼玉 市川 玲子

身につきしコケットリーや誘蛾灯
晚鐘やしづかに花の散りゆきぬ

あてどなきひとへと落花吹かれゆく

やさしかりし風もありけむ夕ざくら

犀川へ花の散りこむ夕べかな

先附の独活にはじまる夏かな

兜煮の眼窩おそるる花疲れ

献木の連隊名や落椿

五月鯉曲げねばならぬこころざし

ぼた山の雀がくれとなりけり

コロニーの如き古巢に山雨急

椎落葉親鸞さまの墓寂びて

椎匂ふ筑波古道の九十九坂

御一新も勇の歌碑も朧かな(祇園)

一見の客にはんなり雪柳

石川 堂上 靖子

東京 渡邊 泰子

茨城 吉田飛龍子

埼玉 菅原 信行



余言

鈴木 榮子

梅若忌子を思ふまじ思ふなり

中島 昌子

母が子を思ふ愛は何にもまして強いものがある。なにしろ血肉を分けた分身である。今の時代の我が子の扱い方は狂気の沙汰と考えるぐらいのものもある。テレビの放映で動物の母親が子育てをしているのを見ても涙ぐましいものがある。

作者は千葉の方。先般千葉大会で房総の秘境と言われている養老溪谷へいったが隣県と言ってもこんなに奥深い処がるのには驚いた。その千葉から作者は毎月東京句会に出席して下さい。

掲句は心の籠ったしつかりした句だ。季語に梅若を据えて、「子を思ふまじ」と一度は決めた心もやはり子を思うのである。その再びの母心が披瀝されている。わが子である。抱きしめて抱きしめて育て、成長しても子を思わぬことはない。なにはともあれ千葉から通って佳き句を成したことを共に喜みたい。

花吹雪きりん首より歩きだす

もちろんこの動物園は、桜の木の多い上野の動物園であろう。いろいろな動物の檻を見回って歩くのだが、この「きりん」だけは遠くからでもすぐ目につく。斑のあるあの長い首が見えると、子供たちは大抵馳け寄ってゆく。可愛い「きりん」もそばに寄るとなかなかの重量感で、見る者を圧倒する。それだけに歩き出すとオーバーに言えば山が動くと言ってもよいほどだ。あの大きな身体を移動するには、「きりん」にもそれなりのやり方があるうというものだ。まず首を振って調子を整えるのだ。それを作者は「首より歩き出す」と適確に言い止め、配するに花吹雪をもつて来て、一幅の絵にしたてたのだ。楽しい句である。

春眠とふ催眠術にかかりけり

久米 憲子

作者は睡くて仕方がないのだ。このごろ季候のせいか睡くてたまらないことがある。

芝居を見にいったも家でテレビを見ていても睡くなる。睡るということは無防備であるし脇から見ると余り行儀のよいものではない。だから我慢しようと思うが睡い我慢は中々出来ない。ところがこの句は催眠術と逃げられてしまった。旨く転換したものだ。こう言われてしまつてはむしろ愉快だ。まことに思いつきとはいいいながらすばつと出来た句はえと言われぬ迫力やユーモアがある。